令和５年度第１回岡山県総合教育会議

日時：令和５年 10 月 23 日（月）13:10～13:50
場所：岡山県庁３階　第１会議室

【総合政策局長】
それでは定刻となりましたので、これより令和５年度第１回岡山県総合教育会議を開催いたします。
それでは、議事進行を、議長である知事にお願いいたします。

【伊原木知事】
皆さま、お忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。
本日のテーマは「令和６年度における取組の方向性」についてでございます。教育については、「教育県岡山の復活」を生き活きプランの重点戦略の一つに位置づけ、各種施策に取り組んでおります。その結果、児童生徒の暴力行為発生割合や非行率が大幅に改善し、落ち着いて学習できる環境が整ってきており、全国学力・学習状況調査においても、全国平均と同程度の学力が定着してきたものと考えております。
一方、教員の働き方改革や不登校対策、ポストコロナにおけるグローバル人材の育成など、喫緊の課題もあることから、皆さまから忌憚のないご意見をいただき、来年度の取り組みの参考とさせていただきたいと考えております。
まず、現状とこれまでの取組等について、説明をお願いしたいと思います。

【教育政策課長】
それではお手元の資料１ページをご覧いただければと思います。
まず、「学力の状況」についてであります。全国学力テストの推移でございますが、左上の小学校では、グラフ下の囲みの方に記載しておりますが、国語は改善傾向で、近年では全国平均を上回り、算数については、全国平均を下回っている状況が続いております。右側の中学校では、国語・数学とも改善傾向で、近年、全国平均と同程度の状況が続いているところでございます。
資料下段の、授業以外で平日１時間以上学習する児童・生徒の割合は、小学校では全国平均を上回る一方、中学校では下回っており、小・中ともに近年減少傾向にございます。
それらに対しての対策の方向性でございますが、チェックの一つ目、小学校の算数に課題があり、児童が理解できているか一層短いサイクルで正確に見取り、つまずきの解消を図る必要があること。それから、授業と家庭学習に連続性を持たせることが必要で、家庭学習習慣の確立に向けた取組の推進が必要であること。それから、中学校英語の言語活動の割合が低く、言語活動の充実した授業実践による英語力の向上が必要と考えております。

続きまして、資料２ページをお願いいたします。

次に、「不登校・長期欠席の状況」でございますが、小・中・高の出現率等は資料、グラフにございますとおりですが、小学校、中学校の不登校出現率は増加傾向にございますけれども、全国平均は下回っているところでございます。また、高校は減少傾向であったものが増加に転じ、全国平均も上回っている、そういった状況でございます。

資料下段の、学校内外の専門機関等で相談・指導等を受けた児童生徒の割合は、こちらは全国の数値でございますが、グラフの下の薄い緑のところ、不登校で専門機関等の相談や指導を受けた小・中学生が、令和３年度で約 15 万６千人、その上の茶色い部分、相談等を受けていない小・中学生が約８万９千人。その上の折れ線グラフにございますように、相談・指導等を受けた小・中学生の割合が、令和３年度 63.7％と、年々減少の傾向にございます。

対策の方向性でございますが、文科省で今年「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策（ＣＯＣＯＬＯプラン）」が策定され、県教委においても、対策の推進が必要でございます。また、全ての子どもたちに「多様な学びの場」を提供すべく、学校内外でさまざまな支援策を講じることが必要と考えております。

続きまして、３ページをお願いします。

「海外留学者数の状況」でございますが、ご覧のとおりコロナの影響で激減しておりますが、直近は回復の兆しが見られるところです。対策の方向性でございますが、コロナ禍以前の水準に回復するよう、留学経費の支援、拡充など、高校生の関心、意欲の喚起が必要。併せて、高校生が夢を育み、課題解決のための他者との協働の学びや、探究する経験を通じて、主体的に考え行動できるよう、グローバル人材の育成が必要と考えております。

最後に、「学校における働き方改革」でございますが、教職員の時間外在校等時間の推移のグラフで、朱色の破線、月 45 時間以内のところを目指しております。しかし、まだまだ小・中・高ともに達成ができていない状況でございます。対策の方向性ですが、国の中教審（中央教育審議会）で、教員業務支援員の全小・中学校への配置や、部活動指導員など外部人材の配置充実が必要な旨の緊急提言がなされまして、県においてもその配置拡充の検討が必要と。また、学校・保護者間の連絡のデジタル化、入学者選抜のＤＸなど、さらなる取組の推進が必要と考えております。

説明は以上でございます。

【伊原木知事】

ありがとうございました。

説明について質問等がありましたら。

私からまず２つ。留学生の長期・短期というのは、長期は何カ月以上になると「長期」でしたか。１年を超えると「長期」ということでしたか。「長期」はコロナ前も異様に少ないですけれども、「ちょうど１年行ってきました」という人は、どちらに含まれるのかなと。

【教育政策課長】
「長期」は、３カ月以上です。

【伊原木知事】
３カ月以上で「長期」。じゃあ、１年行っている人は、この５人、３人、６人、９人に含まれると。それはえらい少ないですね。
その前のページの、専門機関等で相談・指導等を受けた児童生徒の割合というのは、多い方がいいということか、少ない方がいいということですか。

【教育政策課長】
相談を受けた方は、やはり割合が高い方がいいということです。

【伊原木知事】
要するに、ちゃんと生徒をケアしているということ。

【教育政策課長】
左様でございます。

【伊原木知事】
私の質問は以上です。
特に質問がないようでありましたら、今度は皆さま方に、どういった取組に力を入れていくべきかなど、岡山県の教育に対してそれぞれの皆さんのご意見をお聞ききしたいと思います。
いつものとおり席順に従いまして、お願いします。

【教育委員】
私が思いますのは、不登校・長期欠席の対策は今まで以上にしていただきたいのと、やっぱり学校に来るだけではなくて、いろんな民間機関、民間のいろんな所でフォローができるようにやっていただきたいというのがあるんですけれど、それと同時に、不登校だったんだけど、今度は学校に来られるようになったお子さんがおられるんです。小学校の間は全然行けなくて、でも中学校になったらやっぱり受験ということも考えると、朝からは来ていないんですけれども、来られるようになったお子さんがいて。でも、その子たちは小学校の授業が抜けているので、結局授業についていけない。そういう子は特に数学とかあれば、別室の教室にその時だけは行くというかたちのこともあったりするので、不登校から学校に来られるようになった子の学びの保障といいますか、それをもうちょっと。不登校対策と同時にそこもやっぱり考えて、何とかフォローして学力の保障というものをつけてあげられるよ

うにできればなと思っております。

【伊原木知事】
ありがとうございます。

【教育委員】
世の中、いろいろと複雑になってきて、子どもたちの置かれている環境も、非常に格差もあれば複雑に、それぞれ違った環境になっているんじゃないかなというふうに思うんですね。この中でも出ているようにデジタル化を促進していくというようなことで、不登校の問題にしても学力の問題にしても、人との接点の時間というのが逆に減ってきている状況になってきているんではないかというふうに思っています。教職員の方々も働く時間を短くしていかないといけない、その分、子どもとの接点が減っていく。家庭は皆さん共働きになられて、子どもとの時間や接点が減っていく。子どもと大人が向き合えるような時間を、いかに学校の中で確保していくのかという時に、今、大変な予算を配分いただいて、事務の専門の方々であったりとか、教育のサポートをしていただく方々ということに多大な予算をいただいているんだけど、もっと充実させていかないと私はいけないんじゃないかというふうに思っております。人間としての接点、人との接点を求めるということへの時間配分がいるんじゃないかなと思います。

【教育委員】
２つお話ししてよろしいでしょうか。

【伊原木知事】
はい。

【教育委員】
一つは、やはり不登校の件なんですけれども、今日も「多様な学びの場をつくります」、あるいは「ソーシャルワーカーとか部活動指導員の人員配置を厚くして取り組んでいます」というご報告がありましたけれども、もちろんそのあたりはしっかり進めていただきたいんですけれども、やはりそういう場が子どもたちにとって「面白いな」とか、逆に「つまらない」とか思われてしまうと、そこに結局は行かなくなってしまうと思いますので、そこもしっかり強く取り組んでいただく必要があると思います。
会社も一緒で、入社してもすぐ辞めてしまうという人が少なくないと思うんです。どうしたら我々も、「この会社で頑張りたい」と思わせられるかということをいろいろ考えて取り組んでいます。それは、やはり与えたり、外発的といったことで刺激するんじゃなくて、一人ひとりが内発的と言うんでしょうか、自分で気付いたり、「面白い」とどうやったら思わ

せられるかということが、自分の周りでもすごく課題になっています。また、教える人とか、上司、先輩が生き生きとやっているということも重要だと思います。そういうことがクリアしていけば、学力向上とか不登校とか、こういった問題も同時解決していけるんではないかなと思っています。

あともう一つ、「夢」というお話がご報告の中にもありましたけれども、岡山県は「夢育」という目標を掲げていらっしゃいます。でも、今の子どもたちの夢というのは、もう少し世のため人のためとか、環境問題とか宇宙とか、大きな夢を子どもたちが描けるようになっていく必要があるのではないかと感じています。海外留学の話もありましたけれども、外国に行くと、そういう気付きというか発見ができるチャンスになるのではないかなと思いますので、この施策についても、コロナも少し落ち着いてきていますので、積極的に進めていく必要があると考えています。よろしくお願いいたします。

【教育委員】

私は不登校の子どもたちが専門機関に掛かっている割合が減ってきているというのがちょっと心配で、不登校の割合が増えてきているのに、その子たちが専門機関につながっていないのはどういった背景があるのか。もしかしたら、その専門機関ではないところでサポートが得られているのかもしれないんですけれども、もしかしたら孤立しているかもしれない。家庭と一緒に子どもも孤立しているかもしれないと思うと、やはりいろんな大人とつながる仕掛けがいるのではないかなというふうに考えました。

それこそ地域でのいろんな活動に参加しやすくするとか、先ほど「夢育」の話もありましたけれども、何か体験をして、要は感動体験ですよね。こんな楽しいことがあったとか、自分はこんなふうに生かされるんだ、あるいは自分でも役に立つんだという、感動体験とか有用感みたいな体験を、やっぱり意図的につくる仕掛けがいるのかなと。そこでいろんな大人とつながっていって孤立させないということが必要ではないかなと、この報告を見て感じました。

【教育委員】

働き方改革というところで、時間がどうだと押さえていますけれど、働き方改革をした時に、教師がどのような生き方をするのか、というところがもう少し必要になるのかなと。子どもたちを育てていくという意味からいくと、教師の社会性みたいなものがかなり問われると思うんですけれども、この働き方改革をしっかりやっている、生み出している時間で、教師がいかに社会に関わっていくか。そういったことのために時間を減らすのであって、学校の中だけだと社会性がなかなか身に付かない。これは企業でも一緒なんですけれども、一つの企業の中だけだと、なかなか社会性が身に付かないということもある。地域をよりよくしていくための教育ということになると、やはり地域とどう関わるかということが。子どもに関わると思うと、その前に教師自身が自分の暮らしている地域にどう関わっていくか。そ

のために働き方を改革していく。逆に、そのためには学校にもっと地域の人に入ってもらうことによって、教師の負担を減らす。一方で、教師は自分自身が学校外での活動をしていく。そのような循環をどう作っていくかということを、やっていく必要性があるんじゃないかなと思います。

【伊原木知事】
鍵本教育長、お願いします。

【鍵本教育長】
今のお話を聞いていて、不登校の話が多かったんですけれども、やはり専門機関に限らずいろんな人と子どもたちがつながれる場を作っていかなきゃいけない。別室もそうなんですが、教室に入れなかったら別室に入るとか、あるいは他の外部の施設も含めてつながっていけるような場が必要なのかなということ。

あと、委員がおっしゃった、学びの場が面白くなくてはいけないということはとても大事なことであって、学校もそうですし、それから別室の場合もそうですし、いろんな所が子どもたちにとっていろんな学びができるような形にしていかないといけないということは、教育委員会でも思っています。

ですから、一つは授業改善ということで一生懸命にやっていますけれども、授業改善と不登校対策というのは全く別個のものではなくて、やはり学びが面白ければ子どもたちも、先ほどお話がありました感動体験とか有用感というようなものも、この中にしっかり入ってくるようになれば、子どもたちの気持ちも変わってくるのではないかなと。ですから、別のものでなくて、学校の中でどういうふうな学びを作っていくのかによって、子どもたちをしっかり参加させていくことも必要なのかなということはとても思っているところです。授業を変えることによって、やはり楽しい学校、一人ひとりが大事にされる学校を作っていかないといけないというのは、我々は肝に銘じていかないといけないところかなというふうには思っているところであります。

【伊原木知事】
本当に不登校に関して皆さま方の関心が高いなということは、ひしひしと思ったところであります。

実は私は今、知事として11年目が終わろうとしているのですが、１期目もしくは１年目に真っ先に取り組んだのは、荒れの対策でした。大声で怒鳴りまくる、周りの子どもたちに迷惑を掛ける、そういう児童・生徒がクラスに１人でも２人でもいると、たまたま一緒のクラスになった子どもたちは本当に大迷惑を被るわけですので、これは止めさせなければいけないということで、最大限努力をしました。

正直言って、不登校は頑張ってもらうけれども、何かすごい対策を取るというわけではな

かったです。随分、荒れの対策の目処が立ってきて、ようやく不登校に力を入れられるようになった、ガイドラインもできたということなんですけれども、残念ながら、全国平均と比べて改善することはできたけれども、全国的にどんどん小学校も中学校も不登校が増えていく流れとは別に、岡山だけはどんどん減らしていっているよということにはできていないことについては、非常に残念に思っています。周りに対してものすごい悪影響があるとまでは、荒れと違って言えませんけれども、不登校になると本人の人生は大きくハンディを背負うことになってしまう。戻ってこられなかったら大変ですし、戻ってこられたとしても、その間きちんと学べていない、じゃあどうするかというとさっきの話になる。

ここについていろんな考え方があろうかと思うのです。例えば漢字の読み書きとか、それぞれの国の人が自分の国語で書かれた文字を読んだり書いたりできるまでには、それが日本語であれフランス語であれ、かなりの努力を要する。その大半は非常につまんない、まず記憶をしなきゃいけない。そこを頑張って習得していただかないと、国民同士の意思疎通もできないわけですから、それがつまんなくてもやっぱり最低限やっていただく覚悟というのは、私はいると思いますし、その先、つまんないことばっかりじゃなくて、委員にもおっしゃっていただいたように、そこから創造性だとか可能性だとかいろんな喜びを見出していただけるようになるというのが理想なんです。

ですから、これはスポーツとか楽器とかも多分そうだと思うんですが、最初はまず基礎・基本のところはガッツリとやっていただくと。その先、極力つらいとかつまんないじゃなくて、いかに楽しめるか、創造性を発揮できるかというところ。これはどんどん出てくる可能性が増えていくんじゃないかなということで、先生も児童生徒も保護者の皆さんも、まず大変なところはくぐり抜けなきゃいけません。でも、その後は極力本人が楽しみながら学習を進めることができるような工夫、環境というものは作っていかなきゃいけない。そこにすごい夢があったら、宇宙飛行士になりたいなとか、世界の人に読んでもらえるような本を書きたいなとかがあると、また随分違うと思う。何かいいやり方がないのかなというふうに思っています。

一巡した後で、ぜひ二巡はしたいと思います。この流れに沿って私はこれを思ったということでも、全然違う話でも構いませんので。

【教育委員】

私がもう一つ思うのが、小学校の低学年で、小１グッドスタートで 30 人以上の（クラスで)、地域の人材を使って支援員として入っていらっしゃるんですけれども、もし許すならば、２年生、３年生も入れていただきたいと思うんです。というのが、やはり今、小学校は、それこそ家庭科とか書道とかそういうものは専科の先生がされても、ほとんどは担任の先生がされているので、ずっと一日中子どもを見ておくということができない。体育があると、自分も体育の授業で着替えないといけないし、子どもたちも着替えないといけないし、休み時間はまた次の授業で職員室に帰る。子どもたちって、休み時間の間に関係性とかいろんな

ところが見えてくるところがあると思うので、そういうときに、支援員さんが１人いるのといないのとではやはり全然違う。見るところがまた変わってきますし、学力の面でも２年生になって九九ができなくてそのままいってしまって、３年生になっても筆算が分からないという子どもさんがいて、それで結局算数はできない、分からないってなってしまうのはもったいないと思うので、その辺の人材を配慮していただければ、いろんな大人の目があることによって子どもたちのいろんな部分にも気付くことができるので、できればそういうかたちで、支援員さんを入れていただけるとだいぶん違うんではないのかなと思います。

やはり小学校は、夢を膨らませて１年生になってくるので。勉強が楽しいと思って、幼稚園の時から読み聞かせとか読み書きしたりするような意欲を持っているのに、なぜか１年、２年、３年となると学習意欲が下がってくるお子さんもいらっしゃるので、１年生の時から「勉強は楽しいんだよ」と思わせていけるような施策というか、そういう形を小学校のうちから取っていただければいいかなと、私は思います。

【教育委員】

私は先日、保育園と幼稚園の運動会に招かれて行かせていただいたんですね。私が元ＰＴＡ会長をした幼稚園で、「君がＰＴＡ会長していた時と、今はもう時代が違うだろう。見てごらん。おじいちゃん、おばあちゃん、そしてお父さん、お母さん」。世の中、かなり働き方改革が進んだり、働くということ自体の手法もリモートであったりと変わってきて、時間が取れるような世の中に、我々の時と比べるとなっているんじゃないかなというふうに思うんですね。そういった環境にない方もいらっしゃるとは思うんですが、数値で見ても変わって来ているんではないかと。

ただ、その中で、家庭の中で子どもと関わる質っていうんですかね。この中の資料で言うと中学生の方々、小学生もそうなんだけど、「平日に１時間以上学習する児童生徒の割合」。載っていない資料でいくと、例えばスマホだとか携帯の家庭の中でのルールがあるか。これは、中学生は今、51％ぐらいになっていて、落ちてきているんですね。そのことだけで、１時間の学習時間が減っているということではないと思うんですが、やはり家庭教育と学校教育とをもう少し連携して、家庭の中でもしっかり子どもたちに、我々は「夢育」、夢を持って勉強していこうよというようなことを浸透させていかないといけないと思いますし、そういった家庭の中でのルール作りというのを、学校現場からも、今でもサポートはしているんですけど、サポートできるような機会を増やしていかないといけないんじゃないかと思っています。

【教育委員】

最近、私は嬉しいニュースがありまして、藤井聡太さんが八冠を取った。彼は、もうちょっとで高校を卒業できる直前で辞めたり、多分、一日 10 時間以上将棋を打っているので、このデータからは全然参考にならないような人物かもしれないんですけれども、何に感動

したか、嬉しかったかと言いますと、師匠の杉本八段の指導方針といいますか。ご存じかもしれませんけれども、教えすぎない、教えすぎると師匠を超えられないからと。やはり学校現場も、子どもたちには自分たちを超えてほしい、そういう考えが必要だと思いますし、何よりも将棋は楽しいんだという、そういうことをずっと教えてこられたのかなと思います。自分で考えて自分で答えを出す。例えば、ＡＩなんかも最初からは使わせなかった、すぐに答えを教えてくれるようなことはさせなかったというような話を聞いて、世の中に必要なのはこういうことなのかな、今の教育、あるいは働き方の面においても、必要なのはこういうことなのかなと思って、そのニュースを聞いたときにすごく嬉しかったです。

【伊原木知事】
我が子の教育の参考にしたいなと。

【教育委員】
私は海外留学の少なさも少し気になっていて、みんなが行けなくてもいいんですけれども、いろんな文化を肌身に触れて学ぶ機会ですね。日本の狭い中、文化の限られた中にいると、やはり固定観念しか出てこないし、これからの多様な社会に対応するにおいても、その狭い考えではなく、いろんな国の人の立場を知っておくというのは大事ではないかと。文化とか宗教とかいろんな考え方もあるし、それを小さいうちに、高校生までの間に学ぶ体験というのはすごい意味があるのかなと思うんですね。子どもたちで希望する方がいたら、ぜひ行っていただけるような機会を作ってあげたりとか、いろんな事情で出られない方においても、行った人から学ぶ体験であったりとか、ＡＩもいろいろありますから、別のデジタルでの学びをもうちょっと充実させるとか、いろんな文化に触れる機会をたくさん作ってもいいんじゃないかなということを感じています。

【伊原木知事】
私、今回オーストラリアである高校に行かせてもらったら、大きめの高校だったというのも大きいんですけれども、生徒が 80 カ国から来ていました。大学じゃなくて高校でね。交換留学をすると、一番勉強になるのは外国に行った本人ですけれど、オーストラリアなりアメリカから１人来てくれるだけでいろいろと。「あれ？そうなの、アメリカはこうなの」と、その１人からクラスの 40 人だったり学年の 100 人だったりが結構勉強になるので、これはいいですよね。私とすれば、岡山の高校、私立公立問わず、特に公立は必ずどこか一カ所と交換留学の相手がいて、３年生は受験とかあるんでしょうから、１年生か２年生は必ずどこかの国から１人は来ているというのを。80 の国からとまでは言いませんけれど。日本は世界の中でも珍しい画一的なので、これが正しい、これが生き方の全てだとなりやすいときに、「いや、全然違うやり方あるよ」というのが体感できるかどうかって大きいんですよね。

【教育委員】

今の話を聞いて、改めて個別最適な学びをどう作っていくか。個別最適な学びというのは、当然学びの進度も違いますし、関心も違ってくるから、ある意味で言うと、生徒同士の中でもかなり異質な人間がいて、その中でいかに協働の学びをするか。このプログラムですが、特に１人１台端末が入ってきましたので、それをどう使って実行していくかというのが、ある意味でいうと非常に重要な時期ではないかなと思いますね。その中には当然留学生も来るということ。交換留学をやったとすると、その留学生も日本に来た時に個別最適な学びでしなければいけないでしょうし、それをどこまで真剣に、今まではどちらかというと一律的に教えるというスタンスの教師が、そこへどう転換できるかというところを、どれだけの問題意識を持ちながらみんなで取り組んでいけるか。そこがいろんな意味で、今の時期としては中学校から。

【鍵本教育長】

先ほど知事がお話になられた、基礎・基本の部分はやっぱりしっかり押さえた上で、そこに加えて楽しみながらというのは本当に大事なところだというふうに思っています。我々の進めております授業改善とか、「ＰＢＬ（課題解決型学習）」というのはまさにそういう話で、野球で言うと、基礎トレーニングや基礎練習というところはえらいんですけれども、そこはちゃんと教えなきゃいけない。課題解決型の学習といったらそこばかりに目が行きそうなんですが、やっぱり普段の、先ほどの算数の話ではありませんけれど、基礎・基本はちゃんと押さえるということは授業でやった上で、そこから先には、今の学習指導要領にも出てくる「伴走者」、横で走る人ですね。これが学習指導要領の中に言葉として出てくるようになって、ちょっと感動しました。

教師はしゃべりすぎない、教えすぎないというようなことは、今までの日本では言われてなかった。教師ですから「教える人」なんですけれども、そうじゃなくて、教えすぎずに、子どもたちに考えさせないとこれからの日本は駄目になるんじゃないかという危機感が学習指導要領の中にも現れていて。子どもたちに、自己決定の場とか考えさせる場を作っていかないといけない、そうすると、教師は教える側から伴走する側に、横で走る立場にならなければいけないということが、学習指導要領の中にも書いてある。

我々も今、「課題解決型学習」「ＰＢＬ」と小・中・高校にかなり言っているのは、そこを授業の中にも、そして総合的な学習の時間がありますから授業外にも作って、そこで子どもたちが自分で気付いた課題に自分で取り組ませようと。そうなると個別最適な学びになっていく。海外に関心のある子は海外とつながっていけばいいし、この前も韓国から来ましたし、それからフランスへも今行っている子どもたちがいる。いろんな子どもたちがいろんな動きをしているので、そういった機会をしっかり作っていく。つまり、土台の基礎の部分と、自分で考えて自分で走らせていくＰＢＬの部分。基礎があって練習試合があって、今度は本番があるので、本当の社会に今度はつながっていける力になるのかなというのを、岡山県の

教育として構想しているところです。まさに皆さんがおっしゃっていただいたことになってくるかなと思います。

【教育委員】
せっかくこういう場なので、知事にお願いがありまして。

【伊原木知事】
どうぞ。

【教育委員】
教育長が言われました、今の学習指導要領については非常に重要だと思うんですが、教育界とか学校には教育委員会からいろいろと下りていると思いますが、実はこの社会に開かれた教育は、社会側も一緒になってやらないといけない。そうすると、社会側の理解もいるんですね。そういった意味では、逆に言うと知事部局の方から、特に経済界ですとかそういったところにも非常に重要だよというメッセージを。例えば、県の中でも産業労働部も学習指導要領の内容を知っていれば、当然、各自治体に対しても。そういった意味でやっていくには、当然、総合政策局もと思いますけれども。教育委員会とは違う部局に関しても、今の学習指導要領の目指している方向性を理解していただいて、一致して一緒にやっていこうみたいな風土をぜひ作っていただきたいなと。

【伊原木知事】
どういう子どもたちが産業界に来るのかというのが分からずに来るか、だいたい分かるか。何か一週間後の天気予報みたいな話になっちゃうんですけれども、その日にならないと分かんないというのがありますね。

【教育委員】
これは私たち社会、大人の課題でもあると思うんですけれども、今現在の価値観で判断するんじゃなくて、できれば後々の判断基準で考えられるといいのかなと。非常に難しいんですけれども、社会も企業もこれからどうなっていくかは不透明ではあるんですけれども、少し先に目線を置いて考えていきたいなと、今の話を伺って思いました。

【伊原木知事】
クレー射撃で、今あるところを狙うと必ず外れると聞きますよね。
ありがとうございました。皆さんの、特に二巡目のお話が、教育の本質の投資という部分。とにかく教育ほど人生の中で投資的な要素が高いものはなくて、小学３年生の算数でも、どこをとってもその年のうちに回収できることがほぼほぼないという。よく「お父さん、これ

は何の役に立つの」、「いや、必ず役に立つから、今は目をつむってやりなさい」と。確かにそうなんですよね。小学校を途中でドロップアウトした人が、年齢だけ 30 歳になったときに、社会でみんなとしっかりやっていけるかというと、「こいつ、新聞全然読めないんだぜ」とか、簡単な計算すらできないし、比率というものの概念も分かっていないとしたら、多分どんな会社でも責任ある仕事はできないでしょうね。

どう役に立つか分からないけれども、基礎的なことを延々と。小学校や中学校ってほとんどそうですよね。その時に、これが将来役に立つんだという、何となくの確信とか自信がないと、暗い地下のトンネルを延々と掘っているみたいな。いつか、これはどこか光のある所に行くに違いないという、それがないとなかなか難しい。友だちと競争しているうちに、どんどん掘る子どももいるとは思うんですが。そういうことを見ても、社会との関わりとか、大人が「いやいや、こんなことがこういうふうにつながるんだよ」とか。「物理なんていうのは、ロケットでも作らないと関係ないのかと思ったら、サッカーやビリヤード、いろんなことに、音楽でも効いてくるんだよ、これは結局は波長の話だからね」みたいな。すごく退屈そうに見える、もしくは全然役に立たなさそうに見えること、いろんな夢とつながっているんだということが実感できるかどうか。１年１年でいうと、１年で花が咲くヒマワリとスギ・ヒノキで言えば、スギ・ヒノキの最初の５年のうちの３カ年といったら本当にどうしようもないです。でも、それがないとあんなデカイ木にはならないわけです。別に全ての木がスギになってほしいとは思っていない。やっぱりスイートピーがあるからきれいだったりするんですよ。でも、１年１年とか３年ぐらいで見ると大木は育たないので、自分がどれくらいのスパン、人生でどんなことをしたいんだと。したい夢で、多分すべき努力の質と長さは違ってくるので、そのあたりの覚悟、すごい頑張っているプロのサッカー、ファジアーノの選手とか、すごい研究が成功した人に、「オレぐらいの仕事をしようと思ったら、悪いけどこれくらいはしておかないと無理よ」みたいな話。歌手でダンスでかっこいい人も、実はすごく地道なトレーニングをして、初めてこんなかっこいいダンスにつながっているんだというのも、やはり分かっておいてもらいたいですね。

我々、これだけのリソースを入れて、県庁がお金を払っている人の半分以上は先生ですからね、県庁職員ではなくて。予算だって、年間予算をこんな固まりを教育に入れているというのは、ものすごい投資を社会としてもしているし、子どもたちの時間をそこに入れさせているわけなんで、ぜひ、子どもたちが「これだけ鍛えてもらった」「自分で頑張ったおかげでこんなことができる」、そういうことにもしたいですよね。

では、時間になったようです。総合教育会議を終了させていただきます。本日は本当にありがとうございました。